The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文天祥における「孤臣」と「楚囚」
Author(s)	村田, 真由
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2021, 55, p. 25-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91477
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

文天祥における「孤臣」と「楚囚」

村田　真由

キーワード：文天祥／南宋／孤臣／楚囚

はじめに

文天祥（一二三六―一二八三）は南宋末の宰相として敵国モンゴルとの戦争に身を捧げたが、敗れて約三年を牢獄で過ごしたのちに処刑された。囚われの身となりながらもモンゴルへの帰順を拒んで宋王朝への忠義を貫いたことから、死後、忠臣の鑑として尊崇の対象となった。例えば『宋史』文天祥伝には「忠肝は鐵石の如し」とあり、南宋末の鄭思肖「文丞相叙」には「大事に臨みて懼色無く、敢えて節を易えず」[1]とある。我が国においても浅見絅斎『靖獻遺言』に「鞠躬激厲、ひとりその志を行ひ、讒に遭ひ憂へに逢ひ、崎嶇間関、百挫千折すると雖ども、進むことありて退くことなし」[2]とある。これらは文天祥の忠節が一貫して揺るぎないものであったことを称賛した言葉といえる。

だが、果たして文天祥はそのような首尾一貫した精神を維持していたのだろうか。彼の忠義は王朝滅亡によって全く揺らぐことはなかったのだろうか。本稿ではこのような問題について、文天祥が自らを「孤臣」や「楚囚」と表現

した詩に注目しながら考えてみたい。

一、「孤臣」と「楚囚」

文天祥の詩の検討に先立って、「孤臣」と「楚囚」についてその概略を確認しておきたい。まず「孤臣」とは、『孟子』が優れた人物は困難な状況に置かれるものだと述べる中で、「孤臣孽子（こしんげつし）」を挙げるのに由来する。これは主君に見棄てられた臣下を、両親に見棄てられた子＝孤（みなしご）に喩えた表現である。文学作品においては、江淹「恨賦」に「有孤臣危涕、孽子墜心、遷客海上、流戍隴陰。此人但聞悲風汩起、血下霑衿。亦復含酸茹歎、銷落湮沈（涙を流す孤臣、心を落ち込ませる孽子、北海の果てに流される人、隴西の辺塞を守備する人。彼らは悲しげな風が吹き乱れるたびに、血涙で襟を濡らし、辛く苦しい思いと嘆きを抱きつつ、消え去り滅んでしまう）」[3]とあり、「孤臣」の語が初めて用いられる。ここでの「孤臣」は主君から離れた場所に追いやられた臣下をいい、「涕」や「悲風」「血下霑衿」の語を伴って悲哀に満ちた姿で表現される。

このような「孤臣」の姿は、唐代においては韓愈や柳宗元などに継承される。例えば韓愈「赴江陵途中寄贈王二十補闕李十一拾遺李二十六員外翰林三學士」には「孤臣昔放逐、血泣追愆尤。汗漫不省識、怳如乘桴浮（孤臣の私はさきに放逐され、血の涙を流して自分の罪を悔いた。だが際限がなくてはっきりと知ることはできず、筏で浮かんでいるようにぼうっとして心が定まらない）」[4]とあり、また柳宗元「入黄溪聞猿」には「溪路千里曲、哀猿何處鳴。孤臣淚已盡、虚作斷腸聲（谷川に沿った道は千里も曲がりくねり、悲しげな猿の声がどこからか聞こえてくる。孤臣の私は涙も既に涸れて、空しく断腸の声を漏らしている）」[5]とある。これらの詩はいずれも「放逐（流謫）」された自分自

身を「孤臣」と表現した例である。君主から遠ざけられても依然として自分を「臣」と表現している点では、臣下としての誇り高さを示しているといえる。なお、右に挙げた詩に用いられている語に注目すると「血泣」「哀猿」「涙」「斷腸」など、やはり悲しみや孤独を強調する語が多く見られる。以後、このような悲哀感は「孤臣」をうたう詩の基調となっていく。

「孤臣」に類する表現には、他に「楚囚」がある。「楚囚」とは、春秋・楚の鐘儀が晋に囚われの身となっても「南冠（故国の冠）」を脱がなかったという『春秋左伝』成公九年の故事に基づく語である。この「楚囚」もまた、君主のもとを離れた臣下という意味では「孤臣」の一種と考えていいだろう。「楚囚」の例としては、例えば唐の王昌齢が流謫されていた時の作「箜篌引」に「九族分離作楚囚、深谿寂寞絃苦幽。草木悲感聲颼颼、僕本東山爲國憂（一族は離れ離れになって私は楚囚となり、深い谷は寂しくひっそりとして弦の音が悲しみを誘う。草木も悲しんでひゅうひゅうと音を立て、私は東山〔故郷から離れた地〕で国を憂う）」[6]とあり、金の元好問が捕虜となって抑留されていた時の作「夢歸」に「顛頟南冠一楚囚、歸心江漢日東流。青山歷歷鄉國夢、黃葉瀟瀟風雨秋（南冠をかぶった楚囚の私はやつれて、故郷に帰りたいという気持ちは長江と漢水のように日々東に向かって流れつづける。故郷の青山が夢にありありと浮かび、山々の黄葉には秋の風雨がさびしく吹きつけている）」[7]とある。特に元好問の詩において注目すべきは、「楚囚」と共に「夢」がうたわれる点である。詩題には「帰るを夢む」とあり、詩中には「郷国の夢」とあって、もはや現実世界に自らの寄る辺を失った「楚囚」が、儚き非現実の夢を拠り所としている様子がうかがえる。囚われ人たる「楚囚」にとって、夢は切実な意味を持っていたと言えるだろう。

二、文天祥の詩における「孤臣」

文天祥は南宋王朝のための兵を挙げてからモンゴルの獄中で刑死するまでの期間に、計十一首の詩で自らを「孤臣」と表現している。最初に「孤臣」が用いられるのは、次に挙げる「愧故人」（『文山先生全集』巻十三）[8]である。

九門一夜漲風塵　九門　一夜　風塵漲（みなぎ）り
何事癡兒竟誤身　何事か　癡兒　竟（つい）に身を誤る
子産片言圖捄鄭　子産　片言もて　鄭を捄（すく）うを圖（はか）り
仲連本志爲排秦　仲連　本志もて　秦を排するを爲す
但知慷慨稱男子　但だ知る　慷慨たりて　男子を稱するを
不料蹉跎愧故人　料（はか）らざりき　蹉跎たりて　故人に愧ずとは
玉勒雕鞍南上去　玉勒雕鞍　南に上去す
天高月冷泣孤臣　天高月冷　孤臣を泣かしむ

一晩中、朝廷に戦乱の風塵が吹き荒れる中、愚かな私はなぜこのように身を誤ってしまったのだろう。子産（公孫僑）は、（弭兵の会の際に）晋と楚の修好を取り持つ役を務め、弁舌によって鄭に平和をもたらした。また魯仲連は節を曲げずに遊説し、秦の昭王が帝となることを阻止した。私の場合はただ慷慨して男子と称されようと思うばかりで、失敗して故人に恥じるような羽目に陥るとは、思いもしなかった。天子の軍は南方へ逃れてしま

い、寒々しい空にかかる冷たい月光に孤臣は涙する。

徳祐二年（一二七六）正月二十日、文天祥は使者としてモンゴルの陣営に赴いたが、交渉に失敗して抑留されることになった。「故人に愧ず」と題されたこの詩では、王朝に貢献できなかった自分自身の不甲斐なさを述べる。当時、天子の軍は南へと去ってしまっていた。[9] 敵の軍中で孤立した文天祥はここにおいて初めて自身を「孤臣」と自称するのである。ここでの「孤臣」は、国家の大事にあって臣下としての役目を十分に果たせなかった申し訳なさを伴い、悲哀に沈む姿で表現されている。また、祥興二年（一二七九）正月十五日の作に「元夕」（巻十四）がある。

南海觀元夕　南海　元夕を觀る
茲遊古未曾　茲（こ）の遊　古に未だ曾てあらず
人間大競渡　人間　大いに渡を競い
水上小燒燈　水上　小（すこ）しく燈を燒（や）く
世事争强弱　世事　强弱を争い
人情尚廢興　人情　廢興を尚ぶ
孤臣腔血滿　孤臣　腔に血滿つ
死不愧廬陵　死して廬陵に愧じず

南の海上に元宵節の祝いの様子を眺める。このようなことは未だかつてなかっただろう。人々のあいだでは派手に舟を競わせ、水上には小さな灯を浮かべる。（このような行事においてさえ）世の中は強弱を争い、人の情は

勝ち負けを重んじるものだ。孤臣たる私のからだには熱血が満ちてくる。死んでも廬陵（故郷）の先賢に恥じないようにしよう。

この詩が作られた当時、文天祥はモンゴル軍の船内に囚われていた。彼は元宵節を過ごす民の様子を海上から見ながら、「孤臣」である自分のからだには血がたぎってくると述べ、死をも恐れないと宣言する。自らを「孤臣」と表現することで、最後の一人の「臣」となっても国家のために戦うという意思が示されている。同様の例としては、次の「二月六日海上大戰國事不濟孤臣天祥坐北舟中向南慟哭爲之詩曰」（巻十四）も挙げられる。

北兵去家八千里　北兵　家を去ること八千里
椎牛釃酒人人喜　牛を椎し　酒を釃（く）みて　人人喜ぶ
惟有孤臣雨淚垂　惟だ孤臣の雨淚を垂れる有り
冥冥不敢向人啼　冥冥として　敢えて人に向かいて啼かず
六龍杳靄知何處　六龍　杳靄たり　何處なるかを知らん
大海茫茫隔煙霧　大海　茫茫たり　煙霧に隔てらる
我欲借劍斬佞臣　我　劍を借りて佞臣を斬らんと欲す
黄金横帯爲何人　黄金を帯に横（なみ）して　何人とか爲さん

モンゴル兵は北から八千里も離れて到来し、牛を殺し酒をあおって戦勝を喜びあっている。ただ孤臣の私だけが雨のように涙を流すが、目の前は真っ暗であり、人前では泣かない。皇帝の馬車は霞んで、いまやどこにいるの

か分からない。海は茫々と広がって、煙と霧に隔てられて見通せない。私は剣を借りて佞臣を斬ってしまいたい。黄金の印を帯につるす者など、いったい何だというのか。

この詩は祥興二年（一二七九）二月六日、厓山の戦いで南宋の敗戦を見届けた直後の作である。文天祥はまず序文において「孤臣天祥」と自称したうえで、詩中でも自らを「孤臣」と表現する。勝利に湧くモンゴルの軍中で、「孤臣」の文天祥ただ一人が涙を流し、「剣を借りて佞臣を斬らんと欲す」という激しい慷慨の思いを持つさまが描かれる。

以上、見てきた詩はいずれも南宋王朝とモンゴルとの戦時下にあって作られたものである。これらに共通するのは、文天祥があくまでも宋王朝に所属する「臣」として、自らを国家や戦争との関わりのなかで表現している点である。この時の文天祥からすれば南宋王朝はまだ存続する可能性を辛うじて有していたであろう。だからこそ彼は「孤臣」として国家に貢献したいという思いを述べたのではないだろうか。

では、南宋王朝が完全に滅亡し、再興の可能性すら失われたとき、文天祥はどのように自己を表現したのであろうか。まず次の「自歎」（巻十五）を見てみたい。

海闊南風慢　海闊くして　南風慢たり
天昏北斗斜　天昏くして　北斗斜めなり
孤臣傷失國　孤臣　國を失うを傷み
遊子歎無家　遊子　家　無きを歎ず

官飯身如寄　官飯　身は寄せるが如く
征衣鬢欲華　征衣　鬢は華ならんと欲す
越王臺上望　越王臺の上に望めば
家國在天涯　家國　天涯に在り

海は広く、南風がゆるやかに吹き、天は暗く、北斗が斜めにかかっている。孤臣は国を失ったことを悲しみ、遊子（故郷を離れた旅人）は家を失ったことを嘆く。囚人の食事に身を落ち着けることもできず、旅の衣のまま、髪は花のように白くなろうとしている。越王台の上から眺めれば、家と国は遠く天のはてにある。

この詩は厓山の戦いでの敗戦から既に一、二か月が経過した同年春の作である。文天祥はモンゴルに囚われて北へと連行される道中にあって、引き続き「孤臣」の語を用いて国を失った悲しみを述べる。注目すべきは、詩中に「鬢は華ならんと欲す」とあり、文天祥が自らの老いに言及している点である。「孤臣」が老いのイメージを伴ってうたわれる例は、この「自歎」以前には見られない。そもそも「孤臣」は、国家という枠組みのもとで自己を表現する語である。だがここではそれに加えて、自分自身の老いという個人的な悲哀が前面に出てくるのである。これについて、至元十七年（一二八〇）十月一日、モンゴルの獄中で書かれた詩に次の「己卯十月一日予入燕城歳月冉冉忽復周星而予猶未得死也因賦八句」（巻十五）がある。

去冬陽月朔　去冬　陽月の朔
吾始至幽燕　吾　始めて幽燕に至る

浩劫真千載　浩劫　真に千載
浮生又一年　浮生　又た一年
天南照天北　天南は天北を照らし
山後接山前　山後は山前に接す
夢裏乾坤老　夢裏　乾坤老い
孤臣雪咽氈　孤臣　雪と氈を咽(の)む

昨年の冬十月一日、私はこの燕京の牢に入れられた。災いがまさに千年も続くなか、人生はまた一年を経た。天の南が北を照らし、山の後方が前方に近づく。夢のなかで天地は老い、孤臣の私は獄中で雪と共に毛氈を飲み込む。

「雪と氈を咽む」とは、漢の蘇武が匈奴に囚われた際、雪と毛氈を食べて飢えをしのいだ故事をいう。獄中で更に一年という時間を過ごし、文天祥は老いた自分の姿を蘇武になぞらえて「孤臣」と表現している。「天南は天北を照らし、山後は山前に接す」とは、天地に本来あり得ないことが起こった異常さを表現したものと考えられる。(10)「乾坤老ゆ」とあるように、文天祥は時空の老いと連動させる形で、自身の老いを述べるのである。

さらに第八句には「夢裏」とあって、「夢」という表現が出てくることにも注目したい。先に元好問の「夢帰」について述べたように、夢とは非現実の世界であり、現実の世界に居場所を失った人の精神の拠り所として機能することがある。文天祥の場合も、自らが所属すべき南宋王朝が失われてしまったために、夢の中に拠り所を見出そうとしたのではないだろうか。これに関しては、獄中で二年が経過した至元十八年（一二八一）正月十五日の作、「元夕二

首」其一（巻十五）が挙げられる。

燈火喧三市　燈火　三市に喧（かまびす）しく
衣冠宴九宸　衣冠　九宸に宴（うたげ）す
金吾不禁夜　金吾　夜を禁ぜず
公子早行春　公子　早に行春す
夢斷青山遠　夢斷たれて　青山遠く
愁侵白髮新　愁い侵して　白髮新たなる
燕山今夕月　燕山　今夕の月
清影伴孤臣　清影　孤臣に伴う

（元宵節には）燈籠の灯りが町中に賑やかで、衣冠をまとった貴人たちは宮中奥深くで宴を楽しむ。近衛兵もこの時ばかりは夜の外出を禁止せず、公子は早くから春の行楽に出かける。（だが）夢から覚めると故郷は遠く、愁いは増して新たに白髮を増やす。今宵、燕山に月が昇り、清らかな影が孤臣に伴う。

文天祥はこの詩において、前半で夢に見た南宋滅亡以前の賑やかな元宵節の様子を述べたうえで、後半では夢から覚めて獄中で孤独に老いていく自分の姿を対照的に描いている。二年前に作られた前掲「元夕」詩では、元宵節に興じる民の様子を眺めつつ、国家のために血をたぎらせる「孤臣」としての自己がうたわれていた。一方この詩では、元宵節は夢という幻想の中にしか存在しない。「孤臣」はこれまで国家や戦場といった事柄と結びつけられていたが、

ここでは夢と老いに結びつけられている。夢や老いは自らの内面に密着した現象であり、通常は人に知らせることのない極めて個人的な事柄である。この詩で「孤臣」がそれらと共に表現されている点は、注目に値するといえよう。

三、「孤臣」から「楚囚」へ

ここまで文天祥が自らを「孤臣」と表現した詩について見てきたが、「孤臣」と並んで注目されるのが「楚囚」である。王朝滅亡後の詩について言えば、「孤臣」が自称に用いられる詩は徐々に減り、代わって「楚囚」が多く見られるようになる。「臣」から「囚」へという自称の変化は、どのようなことを意味しているだろうか。

まず文天祥が「楚囚」を自称として用いた最も早い例は、南宋滅亡後の至元十六年（一二七九）三月上旬、モンゴル軍の船中に囚われて北へ連行される道中の作、「虎頭山」（巻十五）である。

蚤不逃秦帝　蚤（つと）に　秦帝より逃れずして
終然陥楚囚　終然　楚囚に陥（おちい）る
故園春草夢　故園　春草の夢
舊國夕陽愁　舊國　夕陽の愁
妾婦生何益　妾婦　生じて何をか益せん
男兒死未休　男兒　死するも未だ休（や）まず
虎頭山下路　虎頭山の路を下り

揮涙憶虔州　　涙を揮いて　虔州を憶う

私は早い時期に秦帝（モンゴル兵）から逃げてしまわずに戦ったために、今こうして楚囚となってしまった。むかしの故郷は春の夢のように儚く、かつての宋王朝は斜陽の愁いの彼方に消え去ってしまった。奴婢として生き続けたところで何一つ役に立つことはないが、男子としての志は、死んでも尽きることはない。虎頭山の道を下りながら、涙を振り払って、贛州で兵を起こしたときのことを思い返す。

ここで文天祥は、自分が敵軍の船中に囚われの身となったことを「楚囚に陥る」と表現している。「男兒　死して未だ休まず」の句は、誇り高い「楚囚」の気概を示そうとしたものだろう。だが一方で、詩中には「故園　春草の夢、舊國　夕陽の愁」とあり、故郷と国家に対する哀惜の念が強く押し出されている。このような失われたものへの哀惜の念は、同年五月初二日の誕生日に船中で書かれた「生朝（五月初二日）」（巻十五）にも見られる。

客中端二日　　客中　端二日
風雨送牢愁　　風雨　牢愁を送る
昨歳猶潘母　　昨歳　猶お潘母
今年更楚囚　　今年　更に楚囚
田園荒吉水　　田園　吉水に荒れ
妻子老幽州　　妻子　幽州に老ゆ
莫作長生祝　　作す莫れ　長生の祝

吾心在首丘　　吾心　首丘に在り

故郷から離れた土地で五月二日（誕生日）を迎え、風雨が囚われの身を愁えさせる。昨年の今頃にはまだ潘岳のように母に孝を尽くすこともできたというのに、今年に至っては、残された私もいよいよ楚囚となってしまった。故郷の田園は荒れはて、妻子は北方に連れ去られた。長生きすることを祝うでない。私は首を故郷に向けて死ぬつもりだ。

この詩において、文天祥は自分がいよいよ「楚囚」となってしまったと述べた上で、故郷が荒れ果て、妻子がモンゴル軍に連れ去られたことに思いを巡らせる。離れ離れになった妻子に対する哀惜の念は、獄中の詩において繰り返しうたわれるようになる。例えば「己卯十月一日至燕越五日罹狴犴有感而賦十七首」其六（巻十五）が挙げられる。

風雪重門老楚囚　　風雪　重門　楚囚老ゆ
夢回長夜意悠悠　　夢より回りて　長夜　意悠悠たり
熊魚自古無雙得　　熊魚　古自り雙つながら得ること無し
鵠雀如何可共謀　　鵠雀　如何んぞ共に謀る可き
萬里山河真墮甑　　萬里の山河　真に墮甑なりて
一家妻子枉填溝　　一家の妻子　枉らに溝を填む
兒時愛讀忠臣傳　　兒時　忠臣傳を愛讀するも
不謂身當百六秋　　謂わざりき　身が百六の秋に當たらんとは

風雪のなか、幾重にも閉ざされた牢獄の門の内で楚囚の私はいよいよ老い、夢から覚めれば長い夜に思いはめぐる。熊と魚（義を全うすることと、生を全うすること）の両方を手に入れるのは古より不可能であるし（『孟子』告子篇に「生きることと義を全うすることの両方が手に入れられない場合、義を全うすることを取るべきだ」とある）、鵠（文天祥）と雀（宋の佞臣）とが、どうやって共に国事をはかることができようか。祖国の万里の山河は敵の手に落ちて取り返しがつかず、一家の妻子は無残にも溝の中に落ちてしまった。幼い頃は忠臣伝を愛読したものだが、まさか自分が百六の秋（厄運の時節）に当たろうとは。

この詩は至元十六年（一二七九）十月、モンゴルの獄に入れられてから数か月の間に書かれた作である。獄中で老い行く文天祥は、夢から覚めると物思いに沈み、再び妻子の悲劇を思い返す。詩の末尾には「兒時　忠臣傳を愛讀するも、謂わず　身が百六の秋に當たらんとは」とある。文天祥は幼いころから忠臣に憧れてきたものの、いざ現実として自分がそれを実行してみると、国家は滅びて取り返しがつかず、義と生とはいずれも実現することができず、しかも妻子は無残にも「溝を填む」るような事態に陥ってしまった。文天祥はこの詩において、理想が裏切られて敵国に囚われた空虚感と共に、夢破れて打ちひしがれる自分を「楚囚」と表現するのである。

さらに至元十九年（一二八二）の作に、「自歎（三首）」（巻十四）がある。ここでは其一、其二を挙げる。

猛思身世事　　猛に思う　身世の事
四十七年無　　四十七年の無
鶴髪俄然在　　鶴髪　俄然として在り

鸞飛久已殂　鸞飛　久しく已に殂(ゆ)く
二兒化成土　二兒　化して土と成り
六女掠爲奴　六女　掠められて奴と爲る
只有南冠在　只だ南冠の在る有らば
何妨是丈夫　何ぞ妨げん　是れ丈夫なるを

猛然として自分の人生を思い返せば、四十七年は全く無駄だった。鶴のように真っ白な髪の母上がおられたのは束の間のこと、鸞は飛び去って（母は亡くなって）すでに久しい。二人の息子は死して土となり、六人の娘は敵にさらわれて奴となった。（それでも）この南冠さえ被っていれば、どうして丈夫であることを妨げられようか。

北轍更寒暑　北轍　寒暑を更(ふ)
南冠幾晦冥　南冠　幾んど晦冥なり
家山時入夢　家山　時に夢に入り
妻子亦関情　妻子　亦た情に関す
惆悵心如失　惆悵として　心は失わるるが如く
崎嶇命復輕　崎嶇として　命は復た輕し
遭時命如此　時に遭いて　命は此の如し
薄分笑三生　薄分　三生を笑う

北方で年月は過ぎ行き、南冠はほとんど古ぼけてだめになってしまった。時折故郷の山を夢に見て、妻子にもま

た情を動かされる。やるせなさに心は失われてしまったようであり、険しい人生にあっては命もまた軽いものかと思う。今この時、私の運命は所詮このようなものだ。天下の分け前が薄かった、自分の三世（前世・現世・来世）を笑う。

まず其一では、振り返ってみれば自分の人生は全くの無駄だったと述べ、天子や自分の子供たちといった既に失われたものを数えていく。末尾には「只だ南冠の在る有らば、何ぞ妨げん是れ丈夫なるを」とあり、辛うじて「南冠」が残されているとうたう。だがその「南冠」もかつてのような輝かしいものとしては表現されていない。続く其二には「南冠　幾んど晦冥なり」とあって、「南冠」の輝きは既に失われてしまったと述べる。「家山　時に夢に入り、妻子亦た情に關す」とあるように、古ぼけた「南冠」を被った文天祥の心が最後に向かうのは、失われた故郷と妻子の「夢」なのである。

おわりに

以上、「孤臣」と「楚囚」という自称に注目しながら、文天祥がどのように自己を表現したのかについて考察してきた。それによって、王朝滅亡後の詩においては「孤臣」のイメージが変化していくこと、また「孤臣」に代わる自称として「楚囚」が多く用いられるようになり、失われた故郷や妻子への哀惜が夢という形で前面に出てくることなどを指摘した。従来、文天祥はもっぱら勇壮な憂国の士として理解されてきたが、そのようなステレオタイプに回収されない複雑な側面をそなえていたことも見落としてはならないだろう。

ところで、「自歎（三首）」其二の末尾には「時に遭いて　命は此の如し、薄分　三生を笑う」とある。これは文天祥が自らの人生を振り返り、その悲劇性を笑いによって受け流したものである。文天祥は決して悲しみや憂いに沈んでばかりいたのではなかった。自らの生涯を相対化し、それをより高次の視点から受け流す視点も有していたのである。この点も含めて、文天祥における「孤臣」と「楚囚」については今後さらに考察を深めていきたい。

［注・参考文献］

（1）陳福康校注『鄭思肖集』心史・雑文、上海古籍出版社、一九九一年。
（2）浅見絅斎『靖献遺言』巻五・文天祥、近藤啓吾訳注、講談社、二〇一八年。
（3）李善注『文選』巻十六、上海古籍出版社、一九八六年。
（4）銭仲聯校注『韓昌黎詩繫年集釋』巻三、上海古籍出版社、一九八四年。
（5）呉文治他校注『柳宗元集』巻四十三、中華書局、一九七八年。
（6）胡問濤・羅琴校注『王昌齢集編年校注』巻三、巴蜀書社、二〇〇〇年。
（7）狄寶心校注『元好問詩編年校注』巻四、中華書局、二〇一一年。
（8）文天祥の詩の引用は四部叢刊正編『文山先生全集』（臺灣商務印書館、一九七九年）により、以下、題下に巻数を記す。編年については劉文源校注『文天祥詩集校箋』（中華書局、二〇一七年）を参考にした。
（9）ここではひとまず「故人」は子産と仲連を、「玉勒雕鞍」は天子を奉じた軍をいうと解した。これについて、『文天祥詩集校箋』は「故人」は文天祥の友人・劉小村らを、「玉勒雕鞍」は友人たちが率いていた軍をいうとしている。
（10）文天祥の別の詩「發吉州」（巻十四）に「山河顛倒紛雨泣」、「戊寅臘月二十日空坑敗被執于今二周年矣感懐八句」（巻十五）に「乾坤顛倒真千劫」とある。

（大学院博士前期課程学生）

摘要

文天祥诗中的“孤臣”与“楚囚”

村田 真由

南宋末的文天祥因自始至终忠于宋王朝，在死后被尊为忠臣的典范。然而文天祥的忠诚果真是终始如一的吗？宋朝的灭亡难道没有让他感到不小的震撼并心生动摇吗？针对这些问题，本文将着眼于文天祥诗中以“孤臣”、“楚囚”自称的诗作并对其进行考察。

“孤臣”一词以君臣关系为前提。文天祥在宋朝灭亡前便以“孤臣”自称，从而表白对宋的忠诚。这些诗作中，他都是以国事为先，而将个人的儿女情长往后靠。宋朝灭亡后，尽管他仍然以“孤臣”自称，诗作中却也融入了衰老、梦境等极其私人化的要素。在被捕之后，文天祥更是多用“楚囚”取代“孤臣”形容自身，并用梦的形式抒发对失去的故乡和妻子的哀惜。其中流露出的私人情感开始取代文天祥的忠君爱国之念，成为他后期诗歌的表现重点。

文天祥过去常被理解成豪壮的忧国之士，但应当注意的是，这一刻板印象无法概括其复杂的面貌。是以本文将关注文天祥诗中的私人化情感，力求还原一个更加立体的文天祥形象。